拓殖大学 Shariah Research Institute
イスラーム研究所
معهد دراسات الشريعة
ニューズレター Vol.6 No.2

第三回イスラーム学者国際会議（インドネシア・ジャカルタ）参加報告

拓殖大学イスラーム研究所 客員教授 武藤英臣

6月中旬、インドネシア国内最大のイスラーム団体ナハダトゥル・ウラマー（NAHDLATUL ULAMA、「NU」と表記）から突然、第三回イスラーム学者国際会議出席要請が届いた。会議は、7月29日から8月1日迄の三日間で、世界中のイスラーム学者350名以上が参集すると記されていた。招請状に同封されているプログラムには、ユドヨノ共和国大統領、潘基文国連事務総長、エクマルッディーン・イスラーム諸国会議機構事務総長、アブドルモハセン・ムスリム世界連盟事務総長等の基調講演が予定されていた。

他にメガワティ前インドネシア共和国大統領やシリアの高名なシャリーア学者ワハバ師の講演も予定されていた。既に、2004年第一回会議、2006年二回目が開催され、今回第三回目とのことであった。

会議のテーマは、クルアーン第21章（預言者章）107節「われはただ万有への慈悲として、あなたを遣わしただけである」から“万有への慈悲”としてのイスラーム：「ムスリム世界の平和建設と紛争防止」としていた。

どうして、私が呼ばれたか不明であったが、7月29日インドネシア入りし会議に出席した。日本人は私一人であった。会議の詳細や実際の参加者は別の機会に記述したい。ここでは同会議後発表された「ジャカルタ・メッセージ」を記す。

会議風景

ジャカルタ・メッセージ（仮訳）2008年8月7日
第三回イスラーム学者国際会議
ジャカルタ・ナハダトゥールウラマー（NU）中央執行委員会
「“万有への慈悲”としてのイスラームを標榜し、ムスリム世界の平和建設と紛争防止」
会議開催期間：2008年7月29日−8月1日
会議開催地：インドネシア共和国ジャカルタ
慈悲あまねく慈愛深いアッラーの御名において

アッラーの加護により、2004年第一回イスラーム学者国際会議が開催され、2006年第二回、今回の第三回開催となった。これらの会議で“万有への慈悲”とするイスラームを標榜しムスリム世界の平和建設と紛争防止の方策を探ってきた。

そこで我々第三回イスラーム学者国際会議参加者は以下をジャカルタ・メッセージとして発表する。

1. 聖クルアーン第3章104節に啓示されたとおり、地域的価値と普遍的価値を調和させ、人類の行為規範となっている“万有への慈悲（イスラームは全人類への祝福）”イスラームの手本と模範を実現させる。
2. 聖クルアーン第2章147節と第15章99節に啓示あるように、公正な行為を通し、倫理上の疑念を確信に変え、心理的障壁やジレンマを乗り越え継続的な改革努力を傾注する。
3. 緊張と紛争を生じる原因は宗教的要因からでは無い、と本会議参加者の意見は一致した。緊張と紛争を生じる原因は幾つかあり、それらは社会内部自身によるものと、外圧によるものとがある。外圧は、政治、経済、社会それぞれの搾取が含まれる。従って、本会議は、イスラーム学者やウラマーに、緊張や紛争の原因となる外部勢力の侵入に対し、敏感になり、注意認識するよう呼掛ける。
4. また同様に、グローバライゼーションは、中央集権主義とその反対の地方分権主義勢力を同時に産み出し、これら両勢力は、現行政治体制の検討を国家や民衆へ常に要求し、緊張や紛争を齎し、牽いては人間性に対する反動を創り出している。
5. 平和と統一の宗教としてのイスラーム、他方紛争・暴力・貧困・災害により未だ虐げられている一部ムスリム世界が存在する事実、この乖離を憂慮する。
6. イスラーム脅威論やイスラーム悪魔論的な思考を創出させ、助長させたりしないよう、メディアに求める。ムスリム社会の報道に際し、バランスをとった報道姿勢を取るメディアを高く評価し積極的に応援する。
7. 西欧主要都市にメディア・センターを創設し、そこで一般人と意見を交わし、正確な情報を開示し、ムスリム社会と西欧メディアとのかけ橋の務めを果たす。
8. 『本当にアッラーは、人が自ら変えない限り、決して人びと（の運命）を変えられない。』（聖クルアーン第13章11節）とあるように、主は、徳を追求する人々のため、道を開いておられる。活力、英知、信仰でもって、貧困、失職、無学、あらゆる形の不公正を根絶するため、我々の強い意見を繰り返し主張する。

インドネシア宗教大臣と女性出席者たち

9．ムスリム社会の信仰に関る紛争を解決するため、イスラーム共同体の勇気づけを行う。それは世界平和に大変寄与するであろう。更に、社会内部に紛争や暴力を誘因する如何なるファトワの類を出すことも避けなければならない。

10．イスラーム法の学派やイスラーム学者の国籍にとらわれず、平和の為、知性と感性をもってキャンペーンし、より能動的に行動することを定める。

11．紛争や危機に際し、女性・子供・老齢者・身障者等、大変傷つき易いグループを優先的に確実に守っていくこととする。

12．紛争防止や平和創設を含む全市民参加の際には、ムスリム女性達や青年達に権限を与える。

13．次の原則で「国境無きイスラーム学者」を制定することとした。
　a．知性と感性、　b．対話・偏見のないこと・忍耐力、
　c．人間味、　d．公正性、　e．先見性と指導力性、

14．“国境無きイスラーム学者”たちに、他の専門家やプロ達と協力し行動するよう求める；
　a．平和建設と紛争防止にかかわるあらゆるレベルに対応出来るウラマーの資質向上、
　b．ムスリム世界の紛争を戦略的に分析し、かつ利害関係者を明確に分析する研究調査と詳細にそれを描き出すこと、
　c．早期対応処置が可能な草の根レベルでの早期警戒システムの創設、
　d．絶望に陥った者、容易に挑発に乗る人等、我々の社会のある種のグループの人々のための支援・擁護の確立、
　e．人の心の中に起こる憎悪や憎しみや暴力やテロなどの要素や因子から我々の社会の免疫性を高める、
　f．地区、国家、地域、グローバル各レベルにおいて平和建設と紛争防止の基本・施策・要領等の早急な確立、

次の諸機構を通し、我々は、イスラーム学者世界会議（ICIS）の業務と運営を改組する；

1．各地域それぞれに専門ユニットを創設し、更に紛争裁定、経済開発、宗教、教育・技術開発、メディア、法務・ムスリム少数者の権利等、重要案件のための専門家を任命し、ナハダトゥール・ウラマー（NU）指導のもと、インドネシア・ジャカルタのイスラーム学者世界会議事務局を強化する。

2．東アジア・大洋州、南及び中央アジア、中東、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパ各地域にイスラーム学者世界会議（ICIS）支部を創設する。

3．ムスリム世界で平和建設と紛争予防の専門家やスペシャリストを含む「国境無きイスラーム学者」制度を創設する。

4．著名な大学や研究所、更に専門家や知識人を糾合し、紛争防止、紛争解決、更には紛争後の和平建設と確固たる建設手段迄を研究調査するシンク・タンクを創設する。

5．イスラーム学者国際会議を4年毎に、またイスラーム学者地区会議を2年毎に開催する。

6．国際連合（UN）、イスラーム諸国会議機構（OIC）その他国際機関から承認を取付ける。

最後に、イスラーム学者世界会議（ICIS）創設以来のナハドトゥール・ウラマー中央執行委員会の尽力に謝意を表す。

更にインドネシア共和国政府、特に外務省、更に、本大会開催に尽力したインドネシア共和国国民各位へ本大会参加者全員は深甚なる謝意を表するものである。

2008年8月1日、ジャカルタにて

以上

＊インドネシア最大の宗教社会団体であるナフダトゥール・ウラマー（NU）（「イスラームの覚醒」の意）は、会員数3500万人を擁しており、国家から相対的に自立性を維持し、その指導者であるキヤイたちは独自のイスラーム的正義を主張し続けている。たとえば2006年に米国の性文化の象徴ともいえる「プレイボーイ」誌のインドネシア上陸に不快感と警戒感を強め、激しい抗議を行った経緯がある。

筆者と参加者食事風景

《　聖地マッカ紹介　》

I　マッカ外観

1．名称：マッカ（日本語でメッカ）
- アラビア語「マッカ」
  マッカの語義：「吸い取ること」→　乾燥した土地
- 別称　ウンム・アルクラー（「町々の母」の意）（クルアーン第6章92節）、とバッカ（3章96節）

2．地理、気候
- マッカは北緯21度25分、東経39度49分の地点に位置し、アラビア半島の西、ヒジャーズ地方のほぼ中心にある。
- 港町ジェッダから西へ73km、メディナから南へ約470km、標高700mから400mの裸の岩山に囲まれたワーディー（涸谷）の谷底にできた町である。
- 周辺の山：地上で最初に創造された山と伝えられるアブークバイス山（標高372m、ハラーム・モスクの東側に隣接）、ムハンマドに最初に啓示が下ったヒラー山（標高200m、町の東北約3km）、ムハンマドがヒジュラ（メディナへの移住）の時に三日間隠れたサウル山（標高500m、町の西南6km）がある。
- 夏の最高気温は摂氏48度を超え、冬は18度まで下がり、平均気温は29度から30度である。

II　聖地マッカ

ハラーム・モスク全景

カアバ聖殿

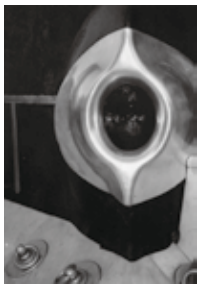
ヒラー山

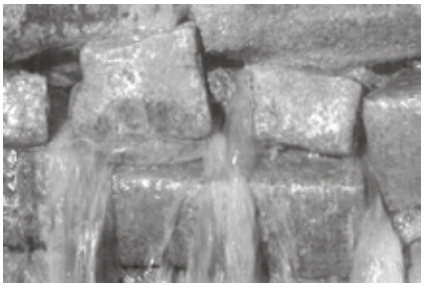
1．聖地
- イスラーム第一の聖地であり、その中心にはカアバ聖殿を擁したハラーム・モスクがある。預言者ムハンマドの生誕の地でもある。
- 聖域：マッカはイブラーヒームによって、カアバ聖殿を中心に、東に約30km、西に約35km、南北に約20kmに広がって聖域と定められたとされる。ムハンマドはその聖域を踏襲した。聖域は異教徒が入ることができない、信徒だけの世界である。

2．ハラーム・モスク
- ハラームの意：禁の意であり、ハラーム・モスク内では殺生や争いはもとより信徒の安全を脅かすことは全て禁じられている。
- 礼拝の価値：ここでの礼拝は10万倍の価値があるとのムハンマドの言葉が伝えられている。
- ハラーム・モスクの構造：現在、一階の中広間と回廊とサアイ廊、二階、屋上から構成されている。敷地面積は16万168㎡（甲子園球場の約4倍）。モスクの使用可能面積は35万6千㎡であり、77万3千人が収容できる。巡礼月には100万人以上が収容される。
- ハラーム・モスク内の史跡：
  中広間にはカアバ聖殿、イブラーヒームの立処、ザムザムの泉がある。カアバ聖殿の高さは15m、南北12m、東西10mであり、カアバとは立方体の意味である。カアバ聖殿がイスラーム教徒の礼拝方向（キブラ）である。故に聖殿の回りで礼拝者は円状になる。
  モスクの東側面にサアイ廊（長さ394.5m、幅20m）があり、その南端にサファー丘（地上約5m）があり、北端にマルワ丘（地上約5m）がある。

サアイ廊

3．史跡にまつわる伝承
- カアバ聖殿：イスラームの伝承によると、アッラーの玉座の下には天使たちが回っているバイト・マアムールと呼ばれる館があり、アッラーはアダムとイブにそれと同じ館を地上に造り、その回りを回るように命じた。その館がカアバ聖殿の始まりである。聖殿はノアの大洪水で流されたが、イブラーヒームがアッラーからその場所を教えられ、息子イスマーイールとカアバ聖殿を新たに建立した。その時に、天使が運んできたとされる黒石をタワーフ（聖殿を周る行）の開始点として聖殿の南東角にはめ込んだ。


カアバの黒石


ザムザムの泉

- イブラーヒームの立処：聖殿の正面には、イブラーヒームの立処とよばれる石（縦40cm、横40cm、高さ50cm）がガラスケースの中に納められている。石にはイブラーヒームの足跡が残っており、聖殿の建立の時にそれを踏台にしたといわれている。
- ザムザムの泉、マルワ丘とサファー丘：その先には、ザムザムの泉への入口がある。ザムザムの泉の始まりは、イブラーヒームの妻ハージャルが息子イスマーイールのために水を求めて、マルワ丘とサファー丘の間をさまよっているときに、天使が降りてきて翼で地面をたたくと水が湧き出てきたという伝承による。

イブラーヒームの立処

イブラーヒームの足跡

ラービタ（世界イスラーム連盟）概要

イスラーム研究所主任研究員　柏 原 良 英

はじめに

イスラーム世界における世界的なイスラーム組織の代表としてサウジアラビアの世界イスラーム連盟（通称ラービタ）がその筆頭にあげられる。本部はマッカにある。それは民間団体ながらマッカというイスラームの聖地で生まれた団体としての特殊性とサウジアラビア政府の全面的な援助を背景にイスラーム世界全体に影響力を持ち続けている。今回はこの団体がどのような背景で生まれ何を目的として活動しているのかについて報告する。

ラービタの標語

ラービタの紋章には次のクルアーンの一節が書かれている。「あなたがたはアッラーの絆に皆でしっかりと縋り、分裂してはならない。」（3章103節）このアッラーの絆とはクルアーンのことであり、クルアーンを中心とするイスラーム教徒の団結を命ずる一節である。この節はさらに続けてアッラーの恩恵によって信者同士が兄弟であると宣言する。「・・・初めあなたがたが（互いに）敵であった時かれはあなたがたの心を（愛情で）結び付け、その御恵みによりあなたがたは兄弟となったのである。」そして団結して一つになった信者は善を行い、公正を求め悪を禁じるウンマ（共同体）となることが命じられる。「あなたがたは一団となり、（人びとを）善いことに招き、公正なことを命じ、邪悪なことを禁じるようにしなさい。」（104節）

ラービタがこのクルアーンの一節を標語として掲げていることから分かるようにイスラーム世界がクルアーンを中心とする一つの統一された集団（ウンマ）となることを目指すために作られた組織であることが理解できる。それはトルコのウスマーン朝が崩壊しウンマの象徴としてのカリフ（預言者の後継者）制が廃止されてウンマの実態がなくなって以来現在に至るイスラーム世界全体に横たわる淡い期待を表している。

ラービタの誕生

ウンマの盛衰とその要因；

ラービタが誕生するきっかけとなったウンマの再興を促す要因として、ウンマの弱体化に対する懸念が挙げられる。イスラームの歴史を振り返った時にウンマが正常に強固な統一をもって存在していた時もあればそれが弱まった時期も見いだせる。その違いはどこから来るのかと考えた時にウンマを構成するイスラーム教徒たちのアッラーの教えに対する忠誠の強弱によるとラービタを作った人々は考えた。かつてイスラームがペルシャとビザンチンという二大勢力に果敢に挑みその範囲を広められたのは信者たちの信仰の強さの結果であった。かつて二代目カリフとなったウマルは「われわれはアッラーがイスラームによって強化された民である。それゆえアッラー以外に代わりになるものを求めない。」と宣言し周辺諸国へイスラームを広めて行った。その結果、イスラームは東は中国から西は大西洋まで四半世紀もかからず到達し得たのである。しかし彼らのイスラームに対する信念が揺らいだ時、不安や混乱が起こり、そこへ付け込むようにモンゴルや十字軍が来襲したのである。またムスリムがその教えをしっかりと守りその絆を握った時には十字軍は敗退しタタールはイスラームに改宗した。このようにウンマの盛衰の歴史はそれを構成するイスラーム教徒たちの自分たちの教えに対する強弱の表れに比例するものであった。

ウンマ崩壊後のイスラーム世界；

オスマントルコ滅亡によりウンマがその実体を失った時、イスラーム世界は新たな十字軍の侵略に晒された。シリアとパレスチナとエジプトを占領したイギリス軍将軍アレンビーはエルサレムに入城する時次のような有名な言葉を残した。「今、十字戦争は終結した。」

多くのイスラーム教徒は次々と起こる災難に見舞われた。彼らの土地は植民となった。フランスは北アフリカとシリアとレバノンとアフリカの多くの地域を植民地とした。イギリスはエジプトとアフリカの一部とパレスチナと東ヨルダンとイラクとアラビア半島の一部とイランとインドを占領した。

①イスラエルとイスラーム世界

第二次世界大戦後それらの多くの植民地は独立したが、イスラーム世界は新たな紛争を迎えることとなった。パレスチナにおいてはすぐにユダヤの同盟者たちとの戦闘に突入した。国連はイスラエルの国家を承認した。そしてそれはムスリムたちの住まいの中心の一部を力ずくで奪うことになった。大国の支援を受けたイスラエルは、あらゆる手段を使って強力になっていった。イスラエル軍は最新兵器を使ってアラブの軍隊を攻撃した。さらにその攻撃は思想戦争にまで発展して言ったとラービタは主張する。それはイスラーム的活動から逸脱させるために思想や結社や派閥の自由を吹き込み、人々をイスラームの信仰やシャリーアからあらゆる手段を用いて遠ざけようとするものであった。

②民族主義と社会主義の台頭

そしてその結果ムスリム大衆の中に二つのグループが現れた。一つはイスラームではないことを唯一条件とする様々な表現で呼びかける民族主義のグループであり、もう一つは共産主義にカバーをかけた社会主義を標榜するものやマルクス・スターリン・レーニン主義を主張するグループである。イスラーム地域のほとんどはこれらの宣伝で覆われ、民族主義や世俗主義や進歩主義やウーマンリブのようなさまざまな主義主張で満たされた。そしてムスリムはその中で団結することなくばらばらになってしまった。

③イスラームの覚醒とサウジアラビアの役割

しかしこのような困難な状況の中にあって、ムスリムたちはこのような様々な思想や宣伝の前で距離を取り始めた。それは彼らの中の善良な人々が新たに現れた思想の信奉者たちの評価によってその立場を無くしていたからである。イスラームを切望する者の多くはこの損失や中傷の弊害から抜け出す必要を感じた。かつては一つであったイスラーム共同体の抵抗を破壊する潮流を押し止める必要性を感じた。そこで考えられたのが総合的な機構の設立だった。それが後のラービタに結実することになった。

一方、イスラーム世界がこのような暗黒状態にあった中で、サウジアラビアはシャリーアに則ったイスラーム国家でありムスリムの連帯を訴え続けていた。それは毎年、イスラーム諸国の宗教指導者たちを巡礼に招待し、彼らによる会議を開催し互いに知り合いになったり協議を行わせていたからである。そのような努力の結果1962年の巡礼の際、イスラーム世界の有志が呼びかけて、その年の5月20日にマッカでイスラーム会議を開催し、そこでこの聖なる地マッカのハラームモスクの近くに本部を置く世界的民間のラービタという名のイスラーム機構を設立することが決定された。そしてラービタはその目標実現のための活動を開始した。

ラービタの概要

1962年設立の世界的民間のイスラーム機構。イスラームの宣教とその基本の解説、その教育、シュブハート（教義の疑義）の論駁、イスラームに加えられた虚偽の証明、ムスリムの問題解決のための援助の提供、ムスリムの宣教、教育、訓練、文化のための各種プログラムの実行。

マッカの本部施設：敷地は53000㎡。建物は事務のための5階建てビル1棟と会議棟、モスク、図書館、倉庫からなる。これらはファハド国王からの寄付による。

ラービタの関連国際機関：国連の経済社会会議オブザーバー、イスラーム諸国会議機構のオブザーバー、ユネスコ・メンバー、ユニセフ・メンバー。

ラービタの活動目標

1．イスラーム法の規則を個人、社会、国家レベルで実行するよう呼びかける。
2．世界のイスラーム活動の従事者たちの努力と相互の利益調整をはかる。
3．クルアーンとスンナに合致するものによる布教手段の進展を促す。
4．ムスリムの布教、報道、教育、文化における手法のレベルアップ。
5．ムスリムの水準向上のための各種会議の成果の活用。
6．巡礼を利用しての思想家やオピニオンリーダたちの親交を進める。
7．現在の問題に対するイスラーム的解決の提供。
8．ムスリム民衆の中でアラビア語の普及とその教育レベル向上への援助。
9．イスラームの目標に奉仕するための活動を行うセンターや事務所の設立
10．自然災害や戦争による被災ムスリムへの救済。
11．モスクの建設、補修、管理における参加。

《イスラーム諸国事情》

海外移住を目指すサウジアラビアの若者たち

イスラーム問題研究家　齊藤力二朗

始めに

サウジアラビアを筆頭に世界の最大原油庫とも言える湾岸諸国の富は、近隣の貧困アラブ、アジア、アフリカ諸国の労働者を吸引し続けている。そのため、多くの国では自国民は今や、少数民族と化しているのが現状だ。

例えば、最近クウェートの内務省が発表した統計によると、クウェートの人口が百万人であるのに対し、メード、調理人、庭師、農夫、運転手などの家庭内で働く外国人労働者数（一般外国人労働者を除く）が、本年8月の段階で50万人を超えるほど、憂慮すべき異常な高率で増殖し続けているという。

世界のムスリム（イスラーム教徒）に義務として課せられるのが、所謂イスラームの五行である。その一つであるハッジ（サウジアラビアにあるイスラームの聖都メッカ巡礼）は、多くのムスリムが生涯一度は完遂をしたいと夢見ている。

そのサウジアラビアの将来を背負うべき青年男女の国外流出が静かに進行しているという。その最大の理由が、彼らが日常受けている社会的な抑圧だと言う。メッカ、メディーナというイスラームの二大聖地を擁するこの国は全国民がムスリムとされ、5千人の宗教警察が黒い長衣を羽織り市内を巡回し市民の行動に厳しい睨みを利かす。一日五回の礼拝時間になると、店舗を閉店させ人々をモスクに誘う。またラマダーン（断食月）の日中の飲食に目を光らし、密造酒や密輸を取り締まり、親族同士以外の男女の同席、密会を摘発すべくレストランやコーヒーショップを立ち入り検査し、車中の男女の関係を確認するために停車を命じるなど、仕事には事欠かない。

他に息抜きをするにも、「不健全」なウェブ・サイトはすべてブロックされ、大衆娯楽の代表である映画館すら皆無では、車を猛発進させ路上や砂漠を爆走するくらいしかない。そのため、交通事故の発生率は異常に高い。

特に女性は、学業では男子学生よりも優秀でありながら、就職機会は限定されている。女性の車の運転が禁じられているから、公共交通機関が未発達の同国では職場に通うのも大変だ。またほぼ全ての行動には、夫や父親など保護者（親権者）の許可が必要である。留学するにも親族男性の同伴が条件だから、留学期間中だけの一時的見せ掛け契約結婚が起きるほどだ。

サウジアラビアの新聞報道から

同国の王族が所有するアル・ワタン紙（2008.9.24）が掲載したサウジアラビア人評論家、アミーラ・カシュガリー女史が記した評論、「何故若者は移住を考えるのか？」を以下に紹介しよう。

以前サウジアラビアの雑誌が実施した調査には、若者たちを移住に駆り立てる理由に触れている。ある若者は理由をこう語る。「僕の生活は決まりきっていて退屈だ。喜びを感じられる唯一の時間は、サウジアラビアを離れる瞬間だ。国外での生活は変化があり楽しめる。そこには望む全てのものが得られる。娯楽・歓楽施設も公共図書館もある。より重要なのは、国外で生活することは、人をして生命を愛させること。しかし、懐具合が悪いので、今すぐ希望するスペインには出掛けられない」

別の若者はこう語る。「何処の国でも人が束縛され自由を奪われたと感じたら、いずれその場所を離れるだろう。サウジアラビアでは、社会が若者に、過酷な慣習・伝統を押し付ける。社会は先祖が体験した同じ方法で若者を生活させたいのだ。禁忌項目は日々増えているように感じる。国外移住という考えが3年前から私の頭をよぎるが、怖くてなかなか実行には踏み込めない。移住地で新たに根を張るのは容易ではなく、移住は後戻りできず、決定するには勇気が要る」

3番目の若者は、「今の仕事より好条件の仕事が見つかれば当然移住を考えるが、外国語が出来ないし、子供の教育問題があるからアラブ諸国、中でもアラブ首長国連邦が望みだ」と語る。

社会研究家のムハンマド・ドウサリー氏が行った「移住を考えさせる理由」に関するサウジアラビア青年への聞き取り調査によると、金銭的理由、すなわちより好条件の就職理由の割合は僅か4%に過ぎない。ところが、「西欧諸国での自由を求め、開放的な生活スタイルに惹かれて」が46%と首位を占めている。

サウジアラビアからの移住実行者・希望者数の公式統計は無い。しかし、アラブ全体に関して国連開発基金が2003年に発表した人材開発レポートは、1995－1996年にアラブの諸大学を卒業した30万人の25%が国外に移住したと指摘している。この頭脳流出によるアラブ諸国の損害額を年間15億ドルと同レポートは見積もる。

若者には締め付けこそが解決策だとの考えで対応し続けると、行き着く先は必ずや、カタツムリのように殻に閉じこもるか、過激行動に走るか二つに一つだ。

この評論には33の読者の書込みがされている。その一例を紹介しよう。

★灼熱の真っ昼間あるショッピング・モールの外で我が国の若者たちが屯しているのを目撃した。彼らはモール入場を禁止されているからだ【注：セクハラなど:モール内での不祥事が絶えないので、門番が男性だけの入場を禁止している】。中に入ると、給料や販売手数料を得ている諸国の男性店員たち（サウジアラビア人を除く）が女性用下着まで販売していた。彼らは冷房のきいた中で我々の女性たちと目を合わせ会話を楽しんでいた。

★理由は分からないが、私も移住への想いが頭から離れず苦しんでいる一人だ。ちなみに、私は小学校の教頭で経済的には悪くは無い。

まだ男性の移住が主流だが、最近女性によるアラブやヨーロッパ諸国への移住が目立つ。アメリカのヒューストンだけで千人程度のサウジ人が国籍取得している。また永住許可を得て全米で生活している者も多い。

ロンドンで発行するサウジアラビア資本のアッシャルク・アルアウサト紙によると、国外への移住や国籍取得を呼掛ける少なからぬ宣伝がサウジ国内の新聞に掲載されるようになったそうだ。

アル・ワタン紙（2007.9.10）は次のように警告する。「サウジアラビア人の国外移住はもはや個人移住ではなく、集団移住と言える。サウジは周辺地域の中でも最大の労働市場なのであるから、移住の誘引は仕事を求めてでは無く、社会的迫害だ。」

また同紙（2008.2.10）はこう書いた。「独身の青年男女は社会的差別に苦しんでいる。彼らは一般の生活から隔離されている。彼らは信頼されずライ病患者のように扱われる。そのため学業や仕事のために実家を離れても、住居を探すのにも苦労する。彼らの行動は良からぬものと決め付けられ、ショッピング・モールの門番に追い払われる。彼ら全てが時間つぶしやナンパのために入店したいわけではないのに。親に対する反抗ではなく、（社会からの）冷たい差別から逃れるために、彼ら若者は老いた我々を捨てて去ってゆく。」

終わりに

前述の一連の記事を執筆者に送ってくれたサウジアラビアのある女子大生も執筆者にこう書いた。「最後の一節に深く胸を打たれました。我々は親だけを置き去りにして出てゆくとは、何と恐ろしいこと。親たちも村落から都市に移り住んだのです。そして今、その子供たちは他国へ移住しようとしています」。「他の湾岸諸国に移住できるのは富裕層だけ。同級生の女友達も卒業後アラブ首長国に移住します。移住と言う伝染病が蔓延して、私の兄も卒業後に移住するのではと心配しています。一族の若者たちは学業のために世界中に散らばっていますが、再びこの地で生活することを受け入れるとは思えません。すると、一体誰がここに残るの？」

世界最大の原油輸出国である巨艦、サウジアラビアは何処に向かうのであろうか？

キルギス共和国の聖地訪問

アリマベコワ・アイーダ

はじめに

私は1083年12月、キルギス共和国のイシックリ州、ポクロフカ村に生まれました。2001年に地元のカイキナ高校を卒業し、キルギス共和国の首都、ビシケク市にあるキルギス国立民族大学の言語学部に入学し、二年間言語学部に属していましたが、「日の出る国」や「経済大国」や「神秘的な国」と呼ばれる日本に興味を持ち始めると同時に、日本語にも興味を持つようになり、2003年の九月に同大学の東洋学部に転部しました。日本で教育を受けることを目標に、一生懸命日本語の勉強をしました。東洋学部の4年生になってから（2004年）に日本の大学への入学が決まり、2005年の3月末に来日し、2005年の4月に国士舘大学の1年生になりました。その時に「努力が報われる」という言い方の本当の意味がわかって来ました。人間は夢を持って、夢がかなえるように努めないといけないと思います。まだ大学を卒業していませんが、大学を卒業してから、出来れば、大学院に入りたいと思います。

キルギス共和国について

まずキルギス共和国の聖地を説明する前に、キルギス共和国の説明から始めたいと思います。ほとんどの日本人はキルギスのことを知らないので、私が話すと「イギリス」といったり中には「キリギリス」という人さえいます。もちろんキルギスはイギリスでもキリギリスでもありません。

キルギス共和国は旧ソ連の一つの国でした。ウズベキスタンとカザフスタンとダジキスタンと中国のウイグル自治区と国境を接しています。キルギスには様々な人種の人が住んでいて「人種のるつぼ」と呼ばれています。公用語はロシア語とキルギス語です。キルギスの国旗の由来について「世界の国旗」成美堂出版、04年10月出版、に次のように書かれています。「1991年のソ連消滅に伴ってキルギス共和国となり、92年に新国旗のコンクールでこのデザインが選ばれた。草原に輝く太陽とキルギス人の移動式テント（コルト）天井部分を組み合わせて図案化し遊牧民としての誇りを表わしている」

キルギスの国旗

イスラームの聖地

次にキルギスのイシクコル州にあるイスラーム教の聖地について説明します。そこはイシュクコリ州のトン県にあります。イスラーム教徒はその聖地へアッラー（現地の人はKUDAIと呼んでいます）に祈るために出かけて行きます。そこはものすごく広々とした場所で、中には山や川があり墓もあります。

またそこには信者の人たちが食べるBORSOK（キルギスの揚げパン）を作るための場所もあります。イスラーム教徒の人たちは聖地に行く時には身を清めてから行きますが、そこに入る時も門の所に置いてある水の入った容器で手や顔を洗い清めます。それからビスミッラー（アッラーの御名によって）と言ってから中に入ります。中には二棟の建物があります。

湖のそばに並ぶ墓地

建物全景

ひとつは訪問者のための建物でもう一つはそこに住むイマームのための建物です。そこを訪れた人はまずアッラーに生贄を捧げるために聖地内で羊を屠畜します。そしてその肉を煮込んで料理します。料理された羊肉は来訪者のための建物に運ばれて、その日来た人たちに振る舞われます。食事の前にイマームによってクルアーンが詠まれ、皆が楽しく食事をした後でアッラーに感謝の気持ちを述べます。

聖地は信心深い心のきれいな人が集まる場所ですから、敷地内はとてもきれいです。ここに来た人は「ここは本当に神聖な場所だ」ということを実感させられます。そこを訪れた人は誰でも癒されるのです。

キルギスはどこへ行っても綺麗なところが多くて、このような国に生まれたことを幸せに思います。大勢の日本の人にも是非キルギスに来てもらってどんなにキルギスが美しい所かを知って欲しいです。キルギスは親日国家ですから言葉ができなくても心配ありません。一人でも多くの日本人にキルギスの美しさを実感してほしいと思っています。

新講座

クルアーン入門（1）

1．クルアーンとは何か

諸経典の集大成

一般的にイスラーム教、キリスト教、ユダヤ教は同じ唯一の神を信仰する姉妹宗教であると言われているが、ユダヤ教はキリストを救世主として認めないし、キリスト教はムハンマドを預言者として認めていない。イスラーム教では本来神は一つであり、その教えも一つであったのが、それぞれの時代の人々の手によって本来の教えが変えられてしまったために、それぞれ異なった宗教になってしまったという立場を取っている。つまり神は人類を創造すると同時に、その中から一人の人物を選び彼に啓示を下すことによって人類を望ましい方向へ導こうとしたのである。この選ばれた人物は預言者（ナビー）と呼ばれ、各民族にそれぞれ預言者は遣わされたとされる。そして預言者の中にも神からの経典を授かる者がいた。それは特に使徒（ラスール）と呼ばれ、他の預言者と区別されている。そしてこの使徒はユダヤ民族に特に現れた。有名なのはムーサー（モーゼ）で、彼に授けられた経典は「タウラート」（律法）と呼ばれ、旧約聖書のモーゼの5書にあたるといわれている。しかし、ユダヤ人は彼の死後、この経典を編纂する時、自分たちの都合に合わせて神からの啓示を変えてしまった。そこで神は何度もユダヤ人たちを正しく導くために次々と預言者や使徒を遣わすが、その度に彼らは預言者や使徒を裏切ってしまうのである。

そこで最後に遣わされたのが、預言者でもあり使徒でもあるムハンマド（マホメット）である。故にムハンマドの下された経典は人類に与えられた最後の経典であり、ここに神の導きは完結したのである。

クルアーンの意味

クルアーンとはアラビア語で「読む」という意味の言葉「QARAA」から派生した「読まれるもの」「朗誦されるもの」といった意味を持っている。この語義からも分かるように、クルアーンは口にして朗誦される時に、よりその持っている美しさが発揮されるといわれている。またイスラーム教におけるクルアーンの定義は、「唯一の神アッラーが天使ジブリール（ガブリエル）を通じて預言者ムハンマドに下した啓示（神の言葉）」である。それは純粋な神の言葉であるが故に。そこには人間（ムハンマド）の言葉は入っていない。そこが他の一神教の聖典と異なるところである。このことからイスラーム教徒にとってクルアーンは、文字どおり人間の手が加えられることがなく残された神の言葉そのものであり何にもまして権威を持つものである。

イスラームにおけるクルアーンの位置

イスラームは中庸を説く宗教である。これはユダヤ教の戒律中心の教えと、それに対抗するように現れた魂の救済を第一に説くキリスト教の教えの中間を行く立場を取るからである。イスラームでは信仰は心だけの問題として捉えず肉体を供えた一個の人間が両方のバランスを保って生きていくことが求められている。そのため神は人間を創造すると同時に、現世だけでなく来世まで含めた世界観を提供し、その中でいかにして人間が生きて行かなければならないかの導きとして、このクルアーンが下されたのである。このためクルアーンは一人の人間が現世で生きて行く上での様々な問題に対して善悪の基準を与え、具体的な解答を与える。そこには神の唯一性（タウヒード）についての教理に始まり、婚姻・離婚・相続・刑罰など個人の問題にとどまらず個人と家族、個人と社会といった点にまで言及されている。これはやがてシャリーア（イスラーム法）として体系付けられた際にハディース（預言者言行録）と共にその第一法源となってイスラーム教とイスラーム社会の根幹を形作ることになる。

またクルアーンはこのような法的規範になるばかりでなく、その中では神の摂理の探求も奨励しており、イスラーム科学や医学に見られるように、一時代を画したイスラーム文化発展の原動力にもなっていることを忘れてはならない。

2．クルアーンの形態

啓示の始まり

預言者ムハンマドに初めて啓示が下ったのは、彼が40歳の時（西暦610年）であった。それ以降633年に無くなるまで23年間に渡り啓示は少しずつその時々の状況に応じて下され続けた。そして信者達はそれを書き留めたり、多くは記憶されて受け継がれ後に第3代カリフ・ウスマーンの時代に現在見られるような一冊の本としての体裁に纏められた。

最初に下された啓示はクルアーン第96章1～5節「読め、創造なされる御方、あなたの主の御名において。彼は一凝血から人間を創られた。読め、あなたの主は最高の尊貴であられる。筆で（書くことを）教えられた。人間に未知なることを教えられた。」

この章には凝血章という名前が付けられているが、クルアーンではそれはその章の主題を示すものではなく、その章に出てくる一つの言葉を取り出して付けられた単なる呼称に過ぎない。

最初の啓示が「クルアーン」という言葉の派生する元になった動詞「Qaraa（読む）」の命令形で始まっていることはクルアーンを象徴しているようで興味深い。この時預言者は文盲で、いきなり天使ジブリールに「読め」と命じられて当惑したと伝えられている。こうして神から預言者であり使徒として選ばれたムハンマドにはイスラームの布教が義務付けられ、彼の行動に従って啓示が下るようになり、彼の死をもって啓示は完結した。

最後の啓示

預言者ムハンマドに下された最後の啓示はクルアーン第2章281節の「あなた方はアッラーに帰される日のために、（彼を）畏れなさい。その時、各人は稼いだ分（自分の行い）に対して精算され、誰も不当に扱われることはないであろう。」である。この後21日後あるいは31日後にムハンマドは他界したと伝えられている。

章の数と節の数

クルアーンは全体が114章からなっているが、それぞれの章は長さはまちまちである。最も長いのは2章の286節で、最も短いのは103章、108章、110章の各3節である。全体の節の数は、6239節である。また信者の便宜のために、全体が30巻に分けており一日一巻ずつ読むと一ヶ月で丁度クルアーンを最初から最後まで読み終えるように工夫されている。特にラマダーン月の断食中の夜に行われるタラウィーフと呼ばれる特別な礼拝では毎夜この一巻づつが礼拝の中で読まれ断食月が終わるとクルアーンを読み終えることになる。

章の並び方

クルアーンは聖書や普通の歴史書や物語のように時間やストーリーを追って内容が展開していくといった書物ではないので、各章をそのように読むことは出来ない。更に同じ章にあっても一つの内容によって統一されている訳ではないので、様々な内容が雑然とつなぎ合わされている印象を受ける。このように章の並べられた順番も規則によるものではなく外見上から長い章が先に置かれ短い章が後ろに来るように配置されている。この並べ方を見た西欧の学者の中にはこれを編纂者であるカリフ・ウスマーンが長い順に並べていった結果であると言う者もあるが、イスラームの学者はこの並び方はムハンマドの時代から変えらることなくそのままの形に集められたものであると主張する。しかし、これを啓示が下った時間に照らし合わせて見ると、初めの長い章はムハンマドの晩年に受けた啓示が中心であり、後ろの短い章は初期の啓示を集めた年代逆順の並べ方に原則的になっていると言える。もちろんこれは原則であるから例外はある。例えば110章などはムハンマドが別れの巡礼と言われる、亡くなる直前に行った唯一の巡礼を行っている間に下されたもので、最晩年の章である。彼はその後2、3ヵ月後に亡くなっている。

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所
〒112-8585　東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419　FAX：03-3947-9416
ホームページURL. http://www.cnc.takushoku-u.ac.jp/

平成20年10月14日発行
発行人　拓殖大学イスラーム研究所
編集人　イスラーム研究所主任研究員
柏原　良英

拓殖大学　イスラーム研究所 ニューズレター

ムハンマドとイスラームの誕生(5)

(6) アビシニアへの移住

クライシュ族はアビシニア王にイスラーム教徒返還を求めたが、キリスト教であるアビシニア王はその要求を断った。

アビシニアに渡った者は、まもなくしてメッカに戻って来たり、または後にメディーナへ直接移住したり、またはそのまま居残った者もいた。

アビシニア移住後まもない頃、アディー家のウマルが入信した。後の第2代カリフとなる人物である。彼は腕力も強く気性も激しかった。彼の入信によりイスラーム教徒たちはハラーム神殿の前で堂々と礼拝できるようになった。

一方、アブー・ジャフルを筆頭に、クライシュ族の迫害は加熱するばかりであったが、ハーシム家の家長であるアブー・ターリブはハーシム家の名誉にかけて甥のムハンマドを保護しつづけた。

616年ころ、アブー・ジャフルはハーシム家の排斥運動を行い、同盟に加わった氏族はハーシム家とは商売、通婚などを禁じた。この排斥運動は2年間続いた。

(7) 悲しみの年

アブー・ジャフルの執拗な嫌がらせも、伯父アブー・ターリブの保護があるうちはムハンマドの命にまで迫ることはなかった。

619年、ムハンマドは最大なる理解者であった最愛の妻ハディージャと終始保護してくれた伯父アブー・ターリブを相次いで亡くした。

この二人の死によって、ムハンマドの身辺は急変した。アブー・ターリブの死後、ハーシム家の家長となったのは彼の弟アブー・ラハブであった。彼は最初はムハンマドの保護を約束したが、ムハンマドの敵対者アブー・ジャフルとその仲間の奸策にのせられて、ムハンマドの保護を断ち切ってしまった。

部族社会で氏族の保護を断ち切られることは、生命の安全の保証がなくなり、常に危険にさらされることを意味した。

保護を断ち切られたムハンマドは今までのようにメッカで布教をすることができなくなった。彼は新天地をメッカの東方20数キロにあるターイフに求めた。ハンマドはターイフの有力者に保護と協力を求めたが、クライシュ族の復讐を恐れて、ムハンマドの申し出を拒否した。ムハンマドは人々に石を投げられ、ターイフを追い出されてしまった。

しかし、ターイフを追われたムハンマドはメッカにすんなりと戻ることはできなかった。彼はハーシム家の保護が取り消されているので、そのままメッカに入ることは生命の保証はないことになる。そこで、幾人かに保護を求めて断られたが、結局ナウファル家のムトイムの保護のもとでメッカに戻ることができた。このムトイムの保護はメッカで伝導をしないという条件付の保護であった。

このようなときいつも慰めてくれるハディージャも今はなく、ムハンマドは今までにない苦況に立たされた。

(8) 夜間飛行と昇天

ムハンマドがこのような苦況に立たされていた頃、神からの慰めと恩寵として夜間飛行と昇天という奇跡的経験を授かった。ある夜、ムハンマドはメッカからエルサレムへ夜の空を旅し、次いで7つの天の各層を昇り、そこで様々な預言者に会い、次いで天国と宇宙のすべてを見せられメッカへ戻った。その時、神から一日5回の礼拝を義務づけられた。ムハンマドの夜間飛行と昇天の噂がメッカの町に広がると、メッカの住人の敵意と嘲笑は一層増すばかりであった。この時にムハンマドのその話を即座に信じた人物がアブー・バクルであり、それ故シッディーク（信じる者）という呼び名が付けられた。

(9) アカバの誓い

条件付のムトイムの保護のもとでメッカへ戻ったムハンマドは、昼間は家に閉じこもり、夜になるとメッカ近郊の定期市に集まってくる遊牧民のテントを訪ねて、イスラームの教えを説くと同時に、彼等の協力を得ようとした。この努力もなかなか実らなかったが、620年になってやっと好機がやってきた。

620年夏の巡礼期、ムハンマドは定期市のテントを訪ねていた。そこで、偶然ではあるが、ヤスリブの6人の巡礼者にイスラームの教えを説くことができた。彼等はムハンマドの人格と啓示の話に感銘を受け、ヤスリブへ戻った。次の年の巡礼に、この6人の内の5人と他に7人の計12人がムハンマドに会いにやってきた。彼等はメッカ郊外のアカバの谷間でムハンマドに会見し、ムハンマドを預言者として認め彼に従い、多神教崇拝・盗み・姦通・女児殺害・隣人のそしりを止めることを誓った。これは「婦人の誓い」または「第1のアカバの誓い」として知られている。

ムハンマドは12名の者と一緒に、信頼する弟子の一人ムスアブをヤスリブへ送った。彼の任務はイスラームの教えを広めることはもとより、ヤスリブの情勢を調査することであった。

12名とムスアブの努力は実り、622年の巡礼には女性2名を伴う75名がムハンマドに会いにきた。彼等はアカバの谷間でムハンマドと会見し、「婦人の誓い」にも増して、彼を武力で守ることを誓い、彼をヤスリブへ招いた。これが「第2のアカバの誓い」もしくは「戦いの誓い」と呼ばれている。

研究会報告

【平成20年度第2、3回タフスィール研究会開催】

今年度第2、3回目のタフスィール（クルアーン解釈）研究会が、6月21日と7月26日のそれぞれ午後2時より文京キャンパスF館で開かれた。今年度はクルアーンの第4章を8回に分けて読んでいる。第2回目はマレーシア大学大学院博士課程の大木博文氏が22節から43節を担当し、3回目は当研究所シャリーア委員会委員の遠藤利夫氏が44節から65節までを読み解説した。大木氏の担当部分では特にこの第4章の名前にもなっている婦人についての規定が詳しく書かれており、ムスリムが結婚するのにふさわしい相手から結婚できる相手、結婚の手続きなど詳しく規定されている。また遠藤氏の担当では特にイスラームにおけるアマーナ（信託）の重要性について解説された。

محتويات العدد

1 المؤتمر الدولي الثالث للعلماء والمثقفين المسلمين بجاكاروتا
أستاذ زائر بمعهد دراسات الشريعة : هيديومي موتو
2.أخبار عن مكة المكرمة
رئيس معهد دراسات الشريعة : نوبوأو موري
3. مقال : رابطة العالم الإسلامي
باحث بمعهد دراسات الشريعة : يوشيهيدي كاشيهارا
4 مقال : الشباب في السعودية
كاتب : ريكيزيرز سائتو
5 مقال : زيارة كيروجيس
طالبة جامعة كوكوشيكان : أعيدة أريمكيكوبا
6. مدخل علوم القرآن (1)
باحث بمعهد دراسات الشريعة : يوشيهيدي كاشيهارا
7. كلمة النشرة: السيرة النبوية (5)
أخبار المعهد:الدورة الثالثة لدراسات التفسير (2)(3)